

(9) オピニオン

(第3種郵便物認可)



1月21日付本紙に「県内 磯焼け被害深刻」の記事が掲載された。コンブが育つ冬場に水温が高めに推移していることが原因でウニが昆布の芽を食べつくし、餌不足でアワビが育たず、ウニも身入りが悪くなっているとのことである。

近年、三陸の海では、アワビにとどまらず、イサダ(ツノナシオキアミ)、サケの漁獲量も減少している。これらの不漁の改善策として「鉄理論」に基づく海への鉄の供給が有効ではないかと考える。

「鉄理論」とは、米国モリス・ランディング海洋研究所のジョン・マーチン博士が1986年ごろから提唱してきた。植物プランクトンの成長とそれによる生物生産量は鉄の不足により制約されるといわれている。

鉄が海に供給されることにより、食物連鎖の始まりである植物プランクトンが多量に発生し、それを食べる動物プランクトン、オキアミ、小魚が豊富になって

東日本大震災後、住民の命と財産を守るために三陸の河口と海岸線にはコンクリートの防災施設が多数整備された。コンクリートはアルカリ性であり、鉄はアルカリと反応すると酸化して沈殿する。したがって防災施設の整備が進んだことで海への鉄イオンの供給が減少し、コンブと植物プランクトンの減少をもたらしている。アワビ、イサダ、サケの不漁につながっているのではないかと懸念される。北海道の増毛漁業協同組合では、かつて豊富にあったコンブがなくなり磯焼けで身の入らないウニだけが

鉄理論で三陸漁業復興を

小川 勝 弘

それを餌とするサケなどの大きな魚の漁場が形成されているのである。筆者は、これに加えて北上高地にある鉄鉱と森林の腐植により形成される鉄イオンが河川で三陸の海まで運ばれていたことも大きな理由と考える。

増えるという問題が発生した。そこで、磯焼けを改善するために、たい肥と鉄を混ぜたものを袋に詰めて海に沈めたところ、コンブが大繁殖し、コンブを食べたウニに身が入り商品として売れるようになったという実例がある。一関市と気仙沼市で取り組まれている「森は海の恋人」運動でも森と海をつないでいるのは鉄であることが明らかになっている。そこで、三陸の漁業を復興させるために「鉄理論」に基づいて海に鉄を供給してみようだろうか。(紫波町 紫波町産業部産業政策監 農村政策フェロ 63歳)